

オーケストラ・アンサンブル金沢

富山特別公演 with 合唱団OEKとやま



サクソフォーン
角口 圭都

Keito Kadoguchi
Saxophone

指揮
山下 一史

Kazufumi
Yamashita
Conductor
© ai ueda

ソプラノ
木村 綾子

Ayako Kimura
Soprano

2022

8/21 SUN 15:00開演(14:15開場)
日 オーバード・ホール

主催：(公財)石川県音楽文化振興事業団、合唱団OEKとやま
共催：北日本新聞社 後援：とやま音楽文化協会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会



※オーケストラと合唱団は十分距離をとって演奏致します。

Program

A. グラズノフ Aleksandr Glazunov

弦楽のための主題と変奏 Op.97

Theme and Variations for Strings in G minor Op.97

テーマ	モデラート	Moderato
第1変奏		
第2変奏	ポコ・ピウ・モッソ	Poco più mosso
第3変奏	トランクイロ	Tranquillo
第4変奏	モデラート・スケルツァンド	Moderato scherzando
第5変奏	アレグロ・モデラート	Allegro moderato
第6変奏	アレグレット	Allegretto

アルト・サクソフォンと 弦楽オーケストラのための協奏曲 Op.109

Concerto for Alto Saxophone and String Orchestra in E-flat major, Op.109

サクソフォン: 角口 圭都
Saxophone Keito Kadoguchi

O. ヤイロ Ola Gjeilo

ドリーム・ウィーヴァー

Dreamweaver

ソプラノ: 木村 綾子
Soprano Ayako Kimura

- | | | | |
|--------|------------|---------|----------|
| 1. 序章 | Prologue | 5. 楽園 | Paradise |
| 2. 夢の歌 | Dreamsong | 6. 神の主権 | Dominion |
| 3. 橋 | The Bridge | 7. 終章 | Epilogue |
| 4. 間奏曲 | Intermezzo | | |

— 休憩 Intermission —

S. ドブロゴス Steve Dobrogosz

テ・デウム

Te Deum

ミサ曲

Mass

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 入祭唱 | Introitus |
| 2. キリエ | Kyrie |
| 3. グローリア | Gloria |
| 4. クレド | Credo |
| 5. サンクトゥス | Sanctus |
| 6. アニュス・デイ | Agnus Dei |

Program Notes

グラズノフ 弦楽のための主題と変奏

1865年、サンクトペテルブルクに生まれたグラズノフは、若くして才能を「ロシア5人組」のバラキレフに見出され、リムスキー＝コルサコフにオーケストレーションを学んだ。一方でチャイコフスキーらの音楽からも多くの特質を吸収し、ロシアの民族主義とロマン主義の融合を果たした。国際的な名声を得たグラズノフは1905年にペテルブルク音楽院の院長に就任。洗練された表現や書法を好んだ彼自身の音楽は、教え子でもあるショスタコーヴィチら若い作曲家たちから古臭いものと捉えられていたが、大きな変革期を迎えていたロシア音楽への教育者としての多大な貢献は高く評価されている。

本作品は、グラズノフの創作力が充実した1895年に作曲された弦楽五重奏版がオリジナル。その後1917年に作曲者自身により弦楽合奏版に編曲されて定着している。ロシアの伝統的な様式に根ざし、優雅で堂々とした主題に続いて6つの変奏が演奏され、その有機的な成長は元の旋律の本質を覆い隠すことがない。

グラズノフ アルト・サクソフォンと弦楽オーケストラのための協奏曲

グラズノフ最晩年の作品。単一楽章で作曲されているが、急-緩-急からなる3つのパートから成り立っており、これは明らかに伝統的な協奏曲のモデルを模している。しかし、作曲技法的には第1のパートに現れる主題をほとんど綺麗に最後のパートまで展開・変化させ続けるという、凝縮し、捻りの効いた作品となっている。この洗練された書法と、ロシア的抒情性が存分に発揮された佳曲は、今日もクラシカル・サクソフォンの重要なレパートリーに数えられている。

ヤイロ ドリーム・ウィーヴァー

ヤイロは1978年の生まれ。現在はニューヨークを拠点として活躍する、合唱の世界では最も頻繁に演奏される作曲家の一人である。

本作品は、作曲者の故郷であるノルウェーに中世から伝わる物語歌（バラッド）「Draumkvedet」を題材としている。物語は、13日間の眠りから目覚めた主人公が自分の見た夢について教会で信徒に語る場所から始まる。その夢の中で主人公は地獄や天国を旅し、ついには魂の救済をうける。

ヤイロ自身が「勇敢で、美しく、恐ろしく、そして最終的には救われる死後の世界の旅」と表現する物語が、彼の音楽スタイルの特徴である神秘的な美しさ、映画的な力強さによって紡がれていく。

2014年の初演。再構成と英詞はアメリカの詩人シルヴェストリが担当した。

ドブロゴス テ・デウム

1956年のアメリカに生まれ、現在ストックホルムにて作曲活動が続けるドブロゴスの作品は、ジャンルを越えて多岐にわたるが、特に合唱作品で人気が高い。

テ・デウムとはキリスト教における三位一体の神をたたえる賛歌のひとつ。多くの作曲家が作品を遺しており、その曲想は、華やかなもの、荘厳なものなど様々だが、ドブロゴスの作品は終始静謐な美しさに満たされている。2002年の作曲。

ドブロゴス ミサ曲

ミサ曲は、その名の通りカトリック教会のミサに伴う声楽曲で、古今の作曲家がミサ通常文と呼ばれるラテン語の歌詞に曲を施している。ジャズ・ピアニストとしても活躍するドブロゴスは、自身の最初の宗教的作品にミサ曲を選ぶと、大胆にもジャズからのアプローチを試み、その現代的な美しさは発表当時から話題となった。彼自身は「カトリック教徒として足繁くラテン語のミサに参加し、下地はできていたと言える。過去の作品の楽譜や録音を避け、できるかぎり白紙の状態から作曲しようとした」と述べている。

全曲を通してピアノが音楽の推進力であり、シンコペーションやテンションを含む和音、ポリリズムといった手法や、終曲におけるピアノとベースによるリズムセクションといったアイデアが、ジャズの雰囲気を出している。また作曲者自身がピアノを受け持つ際には、随所に装飾音やアドリブ的要素が見られ、作品自体にジャズ精神を包含していることが窺える。1992年の作品。

